



味の素株式会社

グループ経営強化の基盤として 受注・出荷システムを再構築

国内初のパッケージを採用し、企業個別の拡張性も確保

■要件

グループ経営を強化する戦略の基盤として、基幹システムの再構築を進めている。受注・出荷システムでは、グループ会社による共同利用を基本にしつつ、各社個別の拡張性も確保する必要があった。

■ソリューション

米国で多くの実績があるYANTRAフレームワークをベースに柔軟性のあるシステムを構築した。業務パッケージとして完結した機能を持ちながら、プログラム部品を組み合わせるカスタマイズが容易にできる。

■成果

商品の鮮度管理やきめ細かい在庫管理など多数の新機能を追加しつつ、旧システムの機能を引き継いだシステムを構築できた。将来、グループ企業各社が独自の機能を追加することも可能になっている。

グループ経営の強化を目指し 受注システムの再構築を検討

2009年に創業100周年を迎える味の素では、2005年度から始めた中長期計画「A-dvance10」でこれまでに高く目標に挑んでいる。数字の「10」はスタート時に6.6%だった連結営業利益率を2010年度までに10%に高めるという意味。同社はその計画を達成するための基本戦略の一つとして「グループ経営」を推進している。

グループ経営強化の重要な基盤となるITは「A-dvance10」の開始以前から再構築を始めてきた。2004年4月には会計システムとしてERPパッケージを味の素に導入、これからの経営基盤として完成させている。それに続いて取り組んだのが、受注・出荷を含めたモノの流れに関するシステムの再構築である。

受注・出荷を管理し、売上・請求につなげる仕組みは、メーカーでは最も要のシステムである。1985年にメインフレームで構築された旧システムは、当時としては革新的だった

が、支店別の営業体制を前提に設計されていた。

プロジェクト全体を統括する情報戦略部情報化推進センターの熊澤誠一郎氏は「物流/経理業務の集中や統合で一定の成果は出ていましたが、さらに効率化を進めるためには、情報システムの刷新は避けて通れなくなっていました」と語る。

同社は1990～2000年にかけて、支店受注業務の受注センターへの統合、グループ会社とのシステム共同利用といった効率化を進め、システムも改修してきたが、限界が見え始めていた。センターで集中処理しているのに、「支店コードを入れないとログインできない、ログインした支店以外のデータ参照更新に手間がかかるなどの課題がありました」と、受注・出荷システムのプロジェクトを担当した情報戦略部情報化推進センターの山下みゆき氏は振り返る。

共通化と柔軟性の相反する目標 フレームワークの採用で実現

それら課題に対して新システムで

は、オープン系の疎結合の仕組みで自由度を上げながら、賞味期限別の在庫管理の強化や物流会社とのEDI化などの実現を目標にした。加えて、同社が求めたのが「柔軟性」である。旧システムは、味の素専用に設計されたものを、後から2社が共同利用したため、2社が我慢して合わせた部分が多かった。その反省から「新システムでは各社のビジネスの特色に合わせて個別機能の開発/拡張もしていきたいという意見が強くありました」（熊澤氏）。

システム規模が大きいと、柔軟性の確保は容易ではない。味の素とシステムを共同利用するグループ2社の計3社による受注件数は1日約4万で、繁忙期は約10万に達する。

要件を複数のITベンダーに提示して提案を募ったところ、新日鉄ソリューションズが示したのが米国で多くの実績がある“YANTRA”をベースにしたソリューションだった。

YANTRAは受発注業務に強いSCM（サプライチェーンマネジメント）パッケージであるが、プログラ



味の素株式会社
執行役員
情報戦略部
部長
山田 裕美氏



味の素株式会社
情報戦略部
情報化推進センター
熊澤 誠一郎氏



味の素株式会社
情報戦略部
情報化推進センター
山下 みゆき氏



味の素株式会社
物流企画部
企画グループ
専任部長
井上 博司氏

AJINOMOTO.

味の素株式会社
本社：東京都中央区京橋1-15-1
設立：1925年(創業1909年)
資本金：798億円(2006年3月31日現在)
売上高：単独6986億円/連結1兆1068億円(2006年3月期)
経常利益：単独330億円/連結614億円
従業員数：単独3460名/連結2万6049名(2006年3月31日現在)
グループ会社：連結対象子会社102社、持分法適用会社12社

ム部品を組み合わせてカスタマイズできる柔軟性を持ったフレームワークでもある。

「受注関係の業務を網羅できるという期待と、複数の会社が共同利用できるプラットフォームでありながら、各社がカスタマイズできるという柔軟性を重視しました」と山下氏は話す。

国内初の導入になるため、当初は不安の声もあったが「最後は、実績ある新日鉄ソリューションズが構築に責任を持つと言ってくれたことが決め手になりました」と執行役員で情報戦略部長の山田裕美氏は語る。

システムの構築が始まると、グループ3社でかなりの部分は共通になったが、日本の商取引や味の素の業務に合わせるため、データベースや機能のカスタマイズを本格的に行っている。従って、受注の“締め”の定義など1日の業務スタイルの基本部分は、旧システムをほぼ引き継ぐ

ことができた。

「従来機能の良い部分を継承できなければ、業務効率は落ちます。ガチガチのパッケージだと実現できませんが、YANTRAではきちんと対応できました」と、このプロジェクトで業務部門をとりまとめた物流企画部企画グループ専任部長の井上博司氏は感心する。

多数の新機能を追加しながら 早い段階でシステムが安定

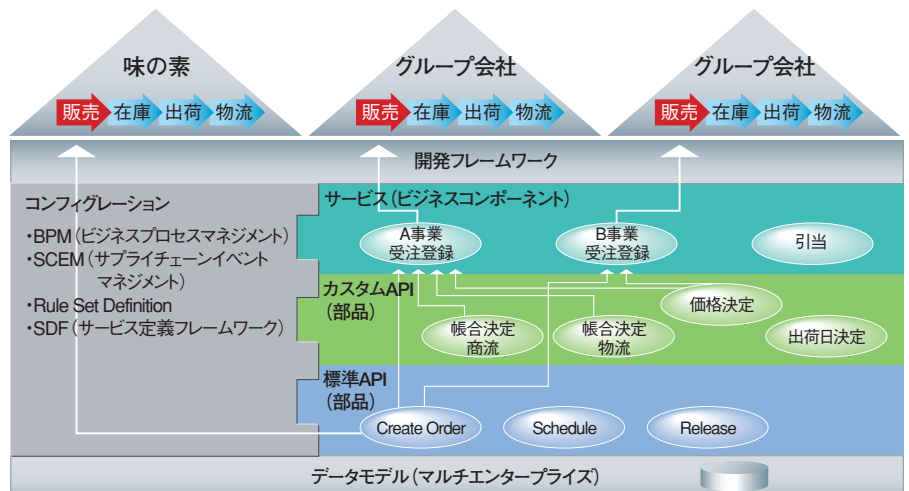
味の素でのシステムの運用開始は2006年2月。処理すべき受注件数が多く、パフォーマンスには懸念があったが、新日鉄ソリューションズは事前に、検証の専門組織「ベンチマーク&コンサルティングセンター」においてテストとチューニングを繰

り返し、業務上大きな支障にならないパフォーマンスを確保した。

開発したプログラムの品質は高かった。4月にグループ2社が運用を開始した際も「他システムとのインタフェースなど大小さまざまなトラブルは起きましたが、締め処理や夜間処理がアベンドし、システムが使用不能になるトラブルはなく、期待通り安定しました」と井上氏は語る。

新システムでは、アラート機能による残作業の把握、Excelダウンロード機能によるデータ・ハンドリングの容易さ向上、業務ペーパーレス化なども実現している。「日々の業務がきちんと遂行できていることで合格点ですが、今後新機能を使い込むことによって、もう一段の効率化を期待しています」(井上氏)。

■味の素グループ3社が使うOMS(Order Management System)の概要



■コアテクノロジー

YANTRAを軸にした柔軟性に優れたフルフィルメント・ソリューション

■システム概要

- サーバー:DB×1、バッチ×2、AP×4(いずれもHP-UX)
- ソフトウェア:Oracle9i、WebLogic
- 開発言語:Java(Yantraフレームワーク)
- 主要アプリケーション:受注・出荷、転送、入庫、在庫管理